



TOKYO2020 ホストタウン事業の一環として 「春日野音楽祭」に於ける国際交流で 田原本町の団体が初のコラボ

田原本町は東京2020オリンピック・パラリンピックに於いてグアテマラを相手国とするホストタウン事業に参加しています。

この度、下記のとおり実施される「春日野音楽祭」に田原本町の団体も参加し、TOKYO2020 ホストタウン事業の一環として音楽や文化を通じ国際交流を図ります。

記

- 日時 令和元年8月31日（土） 午後1時00分～3時00分（終了予定）
- 場所 第4回春日野音楽祭メイン会場（奈良公園・浮雲園地）
『TOKYO2020 ホストタウン交流ブース』
- 出席者 ①田原本町の子どもたち（伝統文化を次世代に伝える会）
…田原本町を発祥の地とする「能楽」はユネスコが指定する世界無形文化遺産でもある。そのような能楽をはじめとした伝統文化を次世代へ伝承すべく、楽しく学ぶ地域の子どもたち。
②UTT パン・フェニックス（5名）
…カリブ文化を代表する打楽器「スティールパン」バンド。演奏者であり、国立トリニダード・ドバゴ大学で音楽を学ぶ学生でもある。
- 実施内容 ①「能楽」と「スティールパン」の交換ワークショップ（特設ブース）
…13:00～開始（14:00 終了予定）
②「国宝殿・鼈太鼓」見学（自由参加）
…14:30～開始
※詳細は別紙参照

<お問合せ先>
田原本町町長公室 村上
TEL：0744-34-2083

【報道資料】

2019年8月30日
田原本町役場

TOKYO2020 ホストタウン事業 春日野音楽祭における国際交流企画案

1) 開催主旨：

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックを機に、大会参加国とホスト役を担う全国自治体との国際交流を促進する「ホストタウン」事業。奈良県田原本町はグアテマラのホストタウンとして、両国の文化を中心とした国際交流を市民レベルで展開されていきます。今回実施いたします奈良・春日野音楽祭における交流企画は、その一環として開催されるものです。

具体的には、本音楽祭に來日する、中南米・カリブ地域を代表する楽器のひとつである「スティールパン」の演奏バンドを、田原本町が発祥とされる日本の伝統芸能のひとつ「能楽」を学ぶ、田原本町の子どもたちがホスト役として迎え、音楽祭特設ブースにて交流ワークショップを実施いたします。

2) 実施内容：

■実施日時 2019年8月31日（土） 13:00～15:00（終了予定）

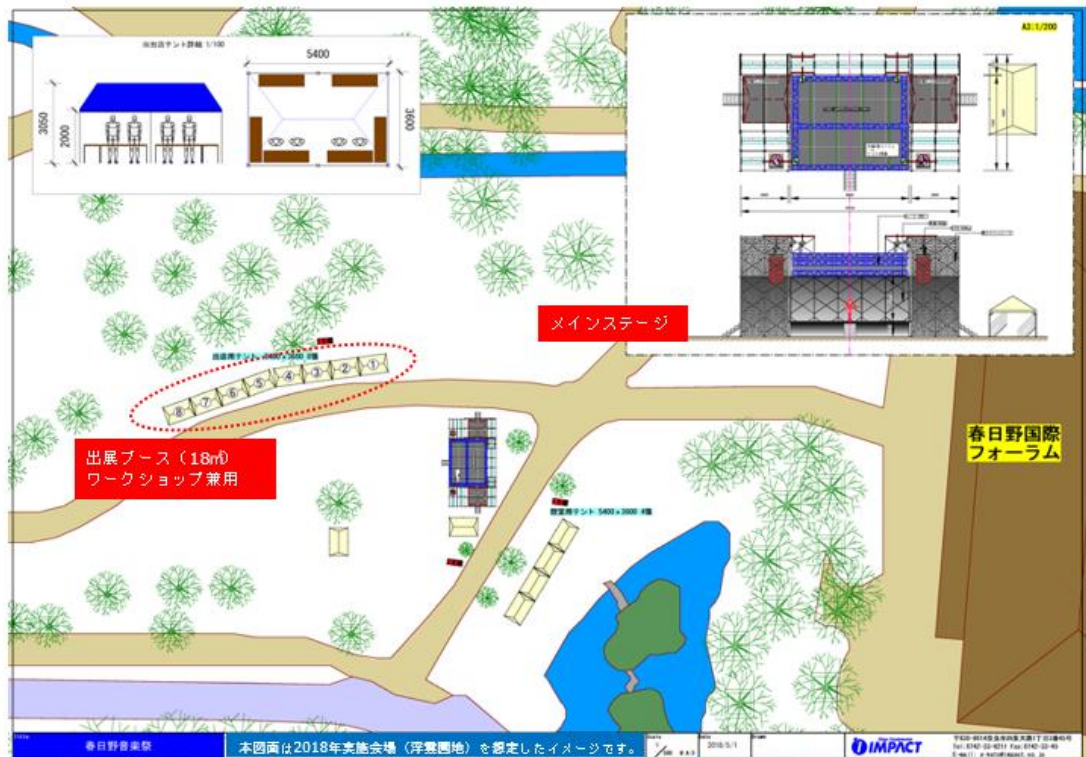
■実施場所 第4回春日野音楽祭メイン会場（奈良公園・浮雲園地）
『TOKYO2020 ホストタウン交流ブース』

会場：浮雲園地・メイン会場

3-(2)-2

春日野音楽祭：メイン会場イメージ（浮雲園地）

図面は2018年度実施レイアウトです。



■参加者 ① UTT パン・フェニックス (5名)

……カリブ文化を代表する打楽器「スティールパン」バンド。演奏者であり、国立トリニダード・ドバゴ大学で音楽を学ぶ学生でもある。※詳細プロフィール参照ください。

【報道資料】

②田原本町の子どもたち（伝統文化を次世代に伝える会）

……田原本町を発祥の地とする「能楽」は、ユネスコが指定する世界無形文化遺産でもあります。そんな能楽の次世代への伝承を目的として、地域の子どもたちに能楽の楽しさを学ぶ同町の子どもたち。

■実施プログラム案

中南米ホストタウン事業・田原本町交流アイデア(春日野音楽祭)

企画アイデア

「能楽」発祥の地・田原本町の子どもたちと、 中南米から来日するスティールパン・バンドの交流イベント。

本企画は、東京2020オリンピック・パラリンピックのホストタウン・プログラムに参加する田原本町の取り組みとして、中南米から来日するスティールパン・バンドのメンバー(大学生)と、「能学」を学ぶ地域の子どもたちとの触れ合いによる、言葉や世代を超えた国際交流の実施をご提案いたします。

日本の「能楽」は、現存する世界最古の舞台芸術『能楽』発祥の地として知られています。その源流は、奈良時代に大陸から渡って来た民間芸能「散楽(さるがく)がもとになっているとされており、笛や鼓の伴奏にのせ、歌い舞う音楽劇の「能」と、滑稽なセリフ劇である「狂言」が融合し『能楽』となり、観阿弥・世阿弥親子によって、14世紀頃にほぼ今日の形に大成されました。

2001年、『能楽』は、ユネスコが発表し、民俗芸能など、世界の無形の文化遺産をたたえる第1回「人類の口承及び無形遺産の傑作に指定され、無形の世界遺産となっています。その発祥の地である田原本町には、世阿弥が学んだ補蔵寺をはじめ、能楽に関係する地名がたくさん残っています。

そして、田原本町の住民らによる『伝統文化を次世代へつたえる会(代表:梅本直子)』では、地域の子どもたちを対象とした能楽教室を定期的を実施するなど、日本が誇る伝統文化を地域の子どもたちの世代に継承し、また、国外に向けた情報発信にも積極的に取り組んでいます。

そこで、本年8月31日(土)・9月1日(日)の2日間に亘って開催される市民音楽祭「第4回・春日野音楽祭」において、田原本町のホストタウン事業に関する取り組みのPRと共に、能楽を学ぶ田原本町の子どもたちをホストとした文化交流型のワークショップを実施、これにより地域住民に向けた田原本町のメッセージを発信していきます。



①『能楽』と『スティールパン』の交換ワークショップ(特設ブース)

13:00 スタート (~14:00 終了予定)

◆「能楽」ワークショップパート 30分程度

- ・子どもたちによる『老松』の演舞と解説(地元高校生による通訳)
- ・子どもたちによる『謡と踊り』の披露
- ・『和鼓』の体験講座 etc.



【報道資料】

- ◇『スティールパン』パート 30分予定
- ・UTT パン・フェニックスによる楽器指導（小品）
 - ・『スティールパン』の歴史（ショートレクチャー）
 - ・『スティールパン』の体験講座 etc.



②『国宝殿・鼈太鼓』見学

(自由参加)

14:30 スタート（～15:00 頃終了予定）

平成の大修復を終えて、現在一般公開中の「鼈太鼓（だだいこ）」は、現存する日本最古の打楽器として春日大社が所蔵する国宝です。奈良時代に諸外国から伝来した様々な楽器や音楽は、奈良の都を起点として、その後、日本各地に伝わり、日本の音楽・芸能文化を形作っていったとされています。この鼈太鼓は、そんな古の時代をいまに伝える貴重な文化財であり、また、田原本町を発祥の地とする「能楽」もまた、その長い歴史の時間のなかで伝承されてきました。

※本交流企画では、①ワークショップ終了後、浮雲園地から国宝殿まで、春日大社・参道を歩きながら向かいます（徒歩15分程度）。1,200年以上も前から変わることのない春日野の風景を散策しながら本殿そばの国宝殿へと向かいます。



※田原本町児童は希望者のみ自由参加が可能です。

※解散は国宝殿前の駐車場となります。

以上

【報道資料】

<参考資料>

UTT PAN PHOENIX (ユーティーティー・パン・フェニックス)



●バンド名

UTT PAN PHOENIX (ユーティーティー・パン・フェニックス)

●来日メンバー

ミア・ゴーマンディーベンジャミン	(テナー)
ニコラス・ジョセフ	(ダブルセカンド)
アリエル・ジェイムス	(チェロ)
カデッシュ・ジョナサン・クラウデン	(ベース)
レミュエル・デイビス	(ドラム&パーカッション)

●バンド・プロフィール

世界で一番新しいアコースティック楽器「スティールパン」発祥の地でもあるトリニダード・トバゴ。この国の国立大学、ユーティーティー・アカデミー・フォー・パーフォーミング・アーツの学生で結成されたスティールバンド。「UTT PAN PHOENIX(ユーティーティー・パン・フェニックス)」。メンバーは20代前半ながら、インベーダーズ、スーパーノバ、トロピカルエンジェルハープなど、名門スティールバンドで10年以上プレイしてきた注目の若手実力派であり、世界最高峰のスティールバンドの大会<パノラマ>でのチャンピオン争いの主力メンバーとして挑み腕を磨いてきた。

アメリカ、キューバ、ジャマイカをはじめとするカリブ諸国、海外での演奏経験も豊富なメンバーである。そんなメンバーの一人であり、今回のツアーの監修も務めるアメリカで音楽博士号を取得したミア・ゴーマンディ(テナー)は数少ない女性のスティールバンドアレンジャーとして著名である。彼女は大学で教鞭をとるかたわら、世界11か国300の団体が参加するバーチャルスティールバンドプロジェクトの代表も務め、新しい形の音楽を通じた国際文化交流として注目を集めている。2019年夏初来日決定!カリブ海のHAPPYな音楽を直行便でお届けします!

【報道資料】

<ワークショップ情報>

鳴らしてみよう！ スティールパン
カリブ海からやってきた、20世紀生まれのアコースティック楽器



南米大陸まで15キロ、カリブ海最南端の島。『スティールパン』は当時まだイギリスの植民地だったトリニダードで、1930年代の終わり頃に発明され、誕生しました。20世紀になって生まれた最も新しい音階のあるアコースティック楽器のひとつです。

スティールパンは、ドラム缶を輪切りにし、その上部をハンマーで叩いてへこませることで音階がつき倍音を奏でます。またテナー、チェロといった様々なパート音域の種類によってドラム缶の側面をカットしています。

楽器が進化することで、スティールパンは現在の姿になりました。

ソロ、少人数のアンサンブルによって奏でられる癒しの音色から、クラシックのフルオーケストラを彷彿とさせる、120人編成が繰り出す圧倒的な音量とパワーのラージ・バンドまで……。スティールパンによる表現は多彩です。

毎年開催されている、世界最大のスティールバンドの大会「トリニダード・トバゴ・ナショナル・パノラマ」には、150を超えるチームがその頂点を目指し激しく競いあいます。ここでしか聴けない音とリズムの樂園を求めて、日本を含む世界中から、プレイヤーと観客たちがこのカーニバルに集まってきています。



<スティールパンの歴史>

今ではトリニダード・トバゴ政府からナショナル・インストルメント（国民楽器）として正式に認められているスティールパンですが、その明るい音色の後ろには、奴隷としてこの島に連れてこられたアフリカ系黒人たちの長い抑圧と苦難の歴史が深く刻まれています。

植民地時代、当時の統治者であったイギリスは、奴隷たちに過酷な試練をあたえました。自

【報道資料】

分たちの言葉を使うことはもちろん、黒人にとって生きることそのものとも言えるほど、大切な太鼓を叩くことを一切禁止したのです。

しかし彼らはめげなかった。竹を切って作った楽器タンブー・バンブーで地面を打ち鳴らしながら踊り、それも禁止されると、今度はビスケットの缶や灯油の缶、とにかく音の出るものをぶっ叩きながら、生き延びていくことを選んだのです。そしてある時、誰かが石油のドラム缶を叩いてそこに音楽を見つけました。それがスティールパンのはじまりでした。

それかたおよそ80年。スティールパンは進化し、パノラマという形で世界一の祭典にまで昇華しました。音楽なしには生きていけない人々の思いがこの楽器の今を作り出したのです。

